

# 白馬のケシ

## 三ヶ尻 妙

私は以前から山に行きたかった。高尾山に五回目の登山をしようかと幾度も思った。旅行なら二つ返事の友人も登山となると誘うことが出来なかった。

最後に登ったのは十五年程前の箱根の駒ヶ岳である。ロープウェイで着いた場所より、駒ヶ岳に連なる山の稜線を伝い、下山のみで大きな岩がゴロゴロした径らしき径もない登山道を、地図を片手の友人と滑り下りて行く。痛む膝足を宥めずかし、辿り着いた場所は大涌谷であった。三時間程かかった私の膝の状態を知った友人は二度と誘ってくれなかった。「次は金時山ね」と背中であげて聞いていた。

今年の七月に白馬へ行くことになった。私はロープウェイ

で登られる所まで行かれれば満足であった。私の計画に二人の親友が参加してくれた。宿は白馬乗鞍の山麓の梅池のホテルである。此処はスキー場である為、山々にはロープウェイとリフトがあった。白馬鍵ヶ岳、杓子岳、白馬岳の白馬三山と小蓮華岳白馬乗鞍岳等々の山が連らなる北アルプスである。どの山も深い雪深がキラキラ輝いていた。夏の梅池の街は、閑古鳥が鳴いていた。空を仰げば白馬岳の積雪がまぶしく、未知の国の秘境に紛れこんだ感があった。歩く人影は無く、冷え澄みきった風が街中を流れ、寂しい限りであった。

何の謂われもないのに「鐘の鳴る丘」があり、キンコンカノンコン「緑の丘の赤い屋根」と音楽を奏で、うら寂しさが増す。

私は大分県出身で、若い頃よく登山をした。由布岳、霧氷の鶴見岳に三度程登山した。黒嶽の麓の鉱泉（炭酸水）の湧くランプの宿に泊り、裏山に椎茸の櫓木を立て掛けてあり、好きなだけ取り、鳥スキヤキをした。入浴は大きな五右衛門風呂に大きな下駄をはき、浮きあがらない様に入った。役所の人と大分銀行の人と一緒に登った。黒嶽は、シャクナゲの山で麓の方からふわふわと深い苔等が生い茂り苔の径が続き、山の霊気を感じながら登った。大小のシャクナゲがびっしり

苔の上に育ち花を咲かせ見事であった。

大船、久住山は五月にはミヤマキリシマで見晴かずピンク色に染まった。頂上に立つた時、眼下を雲が、すいすい流れ、誰も吸ったことのない新鮮な空気を胸一杯に吸い込み爽快であった。清々しい風は汗を一瞬に乾かし登山の疲れはたちまち消えうせる。頂きには高山植物が咲き満ちていた。

この若き日の想い出を私は珠玉の様に大切にし時折たぐり寄せ、大切に胸底にしまっている。

一日目は白馬五竜岳に行った。山の傾斜地に高山植物が数十万株栽培されている。斜面一帯に段々畑を作り、小径をつけた畑になっていた。コマクサ、エゾリンドウ、シモツケソウ等々名も知らない花々で一杯であった。細かく割った石の中に、私の目当ての花が咲いていた。数十株はあった。淡い空の色であった。高山の冷気に震えながら、衆目の視線を独り占めし、それに耐え可憐に凜と咲いていた。「ヒマラヤの青いケシ」である。私は長い間この花を見たかったのである。上野の森に展示されていて見に行ったが一株のみで少し開花しかけていて、傍らに鮮やかに咲いたレプリカが置いてあり、「咲くとこの様になります。」とありました。濃い露草の瑠璃色をしていた。咲いた花を今一度見たいと、白馬へ行った

のである。登山も出来トレッキング気分も味わえるのである。

二日目はロープウェイで一八〇〇米まで登り梅池湿原の木道を歩く。イワカガミ、ワタスゲ、ウメバチソウ等々花畑が何時間も続く。風穴の手前には、キヌガサソウ、エンレイソウが咲き雪渓の中に雪を割り水芭蕉が咲いていた。登山口には大粒の種子を付けた水芭蕉が幾株もあった。環境で花の時期も異なる。風穴を少し行くと、楠川の瀬音がした。私達はそこで折り返すことにした。五時間の自由時間であるが、片道一時間と少しの道程である。楠川に下る坂道で初老の男性に会い、「いいものを見たよ。そこに青いケシが咲いていたよ。」私はその場所に栽培されているのか、道端に何らかの方法で種子が飛来し、ひとりばえなのか聞かなかった。ひとりばえならいいと思った。それは完璧に「白馬のケシ」になったのであるから。やはり白馬のケシは、「白馬五竜のケシ」であって「ヒマラヤの青いケシ」ではない。

私はまだ満足していない。ヒマラヤの苛酷な石の隙間に一本ずつ、いや小さな群落を作っているのか、花の色合いも違うのではないかと、あの瑠璃色の露草色のケシが咲いているのではないかと、見ることのないヒマラヤの地で咲く青いケシを思い憧れるのである。